

【PBLの風と土 第14回】

学びの集団の成熟を通じた個々人の成長

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見（5回目：AAUの実践の特徴、6回目：学習プロセス、7回目：問題設定、8回目：指導法）を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきています。

1. 専門性を横断する問題解決への要請

2020年8月、筆者はデンマークのオールボー大学に久々に訪問しているはずだった。AALBORG PBL WEEKと銘打って、PBLに関する2つの世界会議が8/16から21に連続して開催されることになっていたためである。本連載の当初にも紹介したとおり、オールボー大学では2013年11月にUNESCOのユニツイン（UNITWIN：University Twinning）／ユネスコチェア（UNESCO Chairs）プログラムに採択されたことで2014年の5/26に「The Aalborg Centre for Problem Based Learning in Engineering Science and Sustainability」（略称ではオールボーセンター、あるいはUCPBL）が設置、特に工学教育の分野でチェアプロフェッサーを置いてPBLを推進している。また、連載第1回にも記したとおり、そもそもオールボー大学は1974年の開学当初から全学でPBLを導入していることもあって、全学のPBLの連絡調整を行う機構としてPBL Academyが設置されており、主に学内向けの研修事業の他、UCPBLの活動と並行して2013年からは学術雑誌「The Journal of Problem Based Learning in Higher Education」（JPBLHE）の刊行にも取り組んでいる。

新型コロナウイルス感染（COVID-19）拡大を受け、AALBORG PBL WEEKは2021年に順延されると共に、一部のプログラムのみオンラインで開催されることが4月28日に発表された。当初、PBL WEEKの前半は、UCPBLが2008年から断続的に開催している国際会議「International Re-

search Symposium on PBL」（IRSPBL）の第8回大会が予定されていた。そして後半は国際学会「Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies」（PAN-PBL）による隔年開催の定例会PBL2020が予定されていた。ちなみに米国・カリフォルニア州のサンタクララ大学で開催された前回大会PBL2018は、2017年度の滞在時に受入担当となっていたMogens Jensen先生とCasper Feilberg先生と共に参加し、本連載第4回でもその内容、とりわけ「PBLのはしご(step ladder)モデル」について紹介させていただいている。



図1：当初のAALBORG PBL WEEK 2020と変更後の案内

今回の部分的なオンライン開催では、1週間の会期は1日に圧縮されて8/18の15時（中央ヨーロッパ時間）から3時間、まずIRSPBL2020としてアメリカ、インド、ガーナ、デンマークからリレートーク形式による1時間半の事例紹介とQ&A、続いてPBL2020として世界銀行などで高等教育のプロジェクトに関わってきたJamil Salamiさんがモデレーターとなりオランダ・南アフリ

力・米国マサチューセッツとつないでPBLは他の教授法より優れている点とCOVID-19への対応を共通テーマとした1時間半のシンポジウムが、それぞれ開催された。日本では22時開始ということもあって、後半のシンポジウムの一部は集中力が途切れてしまったものの、前半のオールボー大学の事例発表では、3年前の滞在時の知識を更新することができた。とりわけ興味深かったのは、2019年の秋学期から開始された「Megaprojects」であり、SDGsの17のゴールに照らし合わせて、予めUCPBLのもとで設定されたテーマ（2019年度は2つ、2020年度は継続2・新規1）のもとスーパーバイザーとなる担当教員が複数の視点（Focus）と具体的な挑戦（Challenge）内容を示し、学生が個人もしくはグループで提案書を記して応募、その後教員が学びのコミュニティを組織化（Cluster）し、学部と学年を横断して問題の分析・探究・解決に取り組むものである。

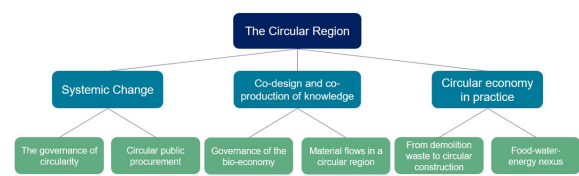


図2：Megaproject「地域資源循環型社会の実現」の例（最上段がテーマ、中段が視点、下段が具体的な挑戦）

ちなみに筆者は、立命館大学文学部の北出慶子先生を代表者とする科研費「日本語支援者の学び解明と促進を目指した多文化サービスラーニングの開発」の成果の一部を発表しようと、PBL2020にエントリーし、採択されていた。こうした個別の発表は自動的にPBL2021の発表に振替となり、より充実したものになるよう、共同研究者と共にさらなる調査と分析を重ねているところである。前掲の「Megaprojects」の取り組みに深い興味を寄せたのは、これまでオールボー大学でのPBLでは、1970年代における産業構造の変化と世界的な大学教育改革の議論を踏まえ、高度職業人の養成と輩出という使命のもとで取り組まれてきたこともあって、あくまで学部内で完結するものが中心だったためである。一方で、筆者が実践と研究の対象は、学部・学年を横断するものばかりであり、場合によっては正課科目だけでなく、部分的には課外活動との接続・連携、課外活動からの展開、課外活動へ拡充もなされているためである。そこで今回は、前回予告したとおり、筆者による

教育実践の中でも減災をテーマとしたクラスを履修した学生がどのような学びと成長を遂げたのかを取り上げ、香川と青山（2015）の言う「越境的対話」、すなわち「異なるコミュニティの人の出会い、交流し互いの重なりや共有部分を創出する一方で、文化的、歴史的に生じた差異を単純に解消すべき悪者とするのではなく、むしろ変化の重要な原動力として生かす実践」（香川と青山, 2015, p.3）の意義と可能性を探っていく。

2. 震災のため(for)から減災を共に(with)

筆者が減災をテーマにしたサービスラーニング科目を担当することになったのは、2011年の4/20の学校法人立命館の常任理事会において、「学外からの支援要請等、緊急に判断・対応が必要なものの対応や被災地域ならびに日本社会の復興・再建にむけた中長期的な支援活動への対応など、立命館としての復興・再建への支援活動の考え方等の整理・具体化」を担うべく、立命館災害復興支援室が設置されることとなり、その準備と事務局運営に参加したことが大きく影響している。詳しくは谷内ら（2012）において文字として収められているが、ちょうど同志社大学大学院総合政策科学研究科から立命館大学共通教育推進機構へと移るタイミングで発生した大規模・広域・複合型災害に際し、かつて立命館大学理工学部環境システム工学科1回生として在籍していた際に阪神・淡路大震災の支援のために仲間たちと共に学生が主体となって立命館大学ボランティア情報交流センターを立ち上げた際にお世話になった方々が、そうした学園政策の意思決定に携わる役職についていた。また筆者は立命館大学への着任に際し、サービスラーニングセンターの副センター長に就任予定で、「物理的な距離の中でも精神的な距離を縮め、被災者に寄り添い、中長期的な支援のあり様をボランティア活動の実践を通じて学ぶ」科目の設置に携わることができたという事情が重なっている。結果として、4/25の立命館大学教務会議で「東日本大震災地域における本学学生のボランティア活動に対する教学的取り扱いについて（ガイドライン）」がまとめられ、学生の自主的なボランティア活動と正課の関わりを整理し、2011年度後期に震災関連ボランティアをテーマとした正課科目の開設が示された。

東日本大震災は2010年度に発生したものの、既に2011年度の開講方針は議決済であったため、前掲のように年度途中での新たな授業開設にあたっては、既の開講されている科目への増クラスをするという方法を採用することとされた。そのため、授業の開講に先立って4/11に立命館大学学生部とサービラーニングセンターの共同により学生が大学内のコミュニティの中心となり震災復興支援活動を行う組織として立ち上げた「立命館大学震災支援活動情報ネットワーク」(311+Rnet)を活動先として、2005年に文部科学省の現代的ニーズ取組支援プログラムの採択を経て開発されたサービラーニング科目「地域活性化ボランティア」(2012年度からはカリキュラム改革で「シチズンシップ・スタディーズI」)として継承)に「FUKKO+R～震災×学びプロジェクト」(略称：震災P)が設置された。東北からは800kmから1,200km離れている関西から現地に駆けつけて継続的な取り組みを重ねていくにあたって必要となる経費については、立命館災害復興支援室に寄せられた寄付を原資とする基金(復興+R基金)をもとに公募された「東日本大震災復興のための『私たちの提案』」から1,538,000円の支援を受けた。募集と選考の結果、26名の学生が履修し、8/5のオリエンテーションを皮切りに、夏休みには9/7～13に「いわてGINGA-NET」による岩手県気仙沼郡住田町を拠点とした釜石市、大船渡市、陸前高田市、大槌町での活動に参加、10月4日以降は原則として火曜日の夕方に「コアタイム」と称して担当教員(筆者)のコーディネートによる対話型の学習機会を設け、3/16の活動報告会まで、チームでの活動と学習が進められた¹⁾。

この震災Pの経験を踏まえ、2012年度からは現在進行形で復旧から復興の只中にある東北での活動に加えて、未だ被災経験のない「被災者」が、過去の災害から復興を遂げたまち、また復興過程にあるまちに訪れ、それぞれの災害の特性などを見つめ直して災害を追体験することにより、未来の災害の被害を減らすことができるようにする「減災×学びプロジェクト」を開講している。²⁾そのため、立命館災害復興支援室はもとより、NPO法人日本災害救援ボランティアネットワークや関西学院大学社会学部の関嘉寛ゼミ等と連携し、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震で被

害があった地域でのフィールドワーク等も行うこととしてきた。また、2016年度には開講後に平成28年熊本地震が発生し、立命館災害復興支援室が熊本県西原村での支援活動を展開したことも相まって、震災Pの時代から続く「立命館大学による学生主体の震災救援と復興支援に関する企画調整と推進」という観点のもと、現地の名産品である唐芋の苗付けや収穫などによる農業復興を通じた地域資源を活かした経済基盤の復興に貢献することにした。こうして、平成28年熊本地震まで、阪神・淡路大震災以降の特定非常災害に対して活動の対象を拡張してきていったものの、その後の西日本豪雨、また2015年開学の大阪いばらきキャンパスにも一定の被害がもたらされた2018年の大阪北部地震に対しては積極的に活動を展開することはできず、災害の規模や種別にかかわらず、むしろ近隣地域での防災活動にも焦点を当てていかなければならない、と捉えていたところで発生したのが、COVID-19である。

表1：2013年度以降の減災Pの基本的な展開パターン(2016年度の受講ガイドの素材より一部を字句修正)

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
							新潟中越			阪神・淡路		東日本
フィールドワーク			定点観測(神戸)					定点観測(神戸)			任意参加	
ボランティア運営参加		田植え(小千谷)		夏祭り(大船渡)	稲刈り(小千谷)							
参与観察					俳句記念(福島)	慰霊祭(小千谷)					追悼式(神戸)	
企画展示・ワークショップ					盆踊り(小千谷)			学祭等(立命館)				
その他関連の動き	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり	★大船渡産まわり

東日本大震災の復旧・復興に向けた直接的な貢献のために東北でのボランティア活動のみを組み込んでいた震災Pから、災害の記憶や経験を過去形で語る方々と共に過ごすことで気づきや学びを得ることを重視するようになった減災Pへの移行は、筆者にインター・コミュニティ・デザインという観点のもとでのアクションリサーチを展開をももたらした。一方で、立命館大学の教育実践として安定的に展開され続ける上では、この科目が筆者のゼミではないことを鑑み、属人化を避けねばならない。折しも2017年に筆者がデンマークで学外研究を行う際には同僚の宮下聖史講師(当時、2020年度より島根県立大学准教授)を担当教員にプロジェクトは展開された。ただ、減災Pが現在まで続いてきたのは、本連載第9回などで

紹介したSOFARモデル (Bringle et al., 2009) を援用するまでもなく、立命館大学サービスラーニングセンター事務局の丁寧な連絡・調整、さらには現場の皆さんに厳しくも細やかな指導・監督を頂戴した賜物であり、記して謝意を表したい。

3. 学びのコミュニティの維持・発展

震災Pから減災Pへの展開にあたって変化したのは、サービス・ラーニングのプロジェクトとしての現場との関係構築のあり方だけではない。とりわけ、過年度の受講生が次年度以降の取り組みを下支えすることにより、年度を重ねるごとに関係の質が高まりを見せている。それは、E.H.エリクソンの言う個人の発達概念としての世代継承性 (Generativity: ジェネラティビティ) より、マイケル・ポランニーの言う暗黙知の創発 (emergence) によるものではないかと捉えている。松岡 (2019) の解釈を重ねるなら、創発とは「それまでの思考のプロセスや実験のプロセスからは想定できなかったことがおこること」であり、それらは「個人の能力」「時代の要請」「グループの相互刺激」「孤立との闘争」「謙虚な態度」「どうしようもない我欲」「直観」かは「定めがたいもの、決めがたいもの」であり、「不意の確証」を経験し「見えない連携」がはたらくことだという。³こうして列挙された要素を見つめてみるなら、震災Pでは個人の能力、時代の要請が色濃く反映し、減災Pでは(感覚的には相互作用と言い換えたいところだが)「グループの相互刺激」や「直観」を通じて、その場その場の(単に場当たりのという意味ではない)事態の刷新が図られていったと言える。

例えば、震災Pでの活動の1つ、気仙沼大島の写真展では、赤澤ら (2013) の報告にも含まれているように、個人を主軸にした活動と学びによって、「何かしたい」受講生に具体的な行為の方法を提示した。それは、図らずも先導する学生が、東日本大震災の発災前に立命館大学生を紹介するインターネットでの連載インタビュー記事の結びの発言を実行することでもあった。⁴具体的には、夏にカンボジアで1,000人の笑顔を撮影してきたことを受け「どこかで震災が起きた場合、メディアを通して私たちに伝わるのは、震災の規模や被災者数が主で、その復興の裏側についてはほとんど知られることなく忘れ去られてしまうと思う」

と述べ、「僕は、その裏側にある現地のありふれた日常や人々の笑顔を写真や映像で伝えていきたい」と語った。それから約1年後、彼は震災Pの受講生らと共に現地に足を運び、さらには授業終了後も現地との往復を重ねて小学校の校長先生から卒業アルバムの制作協力の依頼を受けており、卒業後には愛知と東京に本社を置く新聞社で写真記者の職に就き、震災以前からの関心と震災後に出会った人々との思い出を携え、常々時代の要請に応えている。

このように、強靱な個性や使命感をもとに集団の凝集性が高められ、強靱な個性を持たない場合は使命感をもとに社会的な随伴性によって各種の活動や学びが重ねられた震災Pに対して、減災Pでは神戸、新潟、そして東北で、学びと実践の共同体が生成・維持・発展していくこととなった。神戸では、2012年度に「人と防災未来センター」を訪問して展示の観覧だけでなく、5階資料室に訪れたことを契機として、2013年度より震災資料専門員の高森順子さん(当時、2018年度より愛知淑徳大学助教)の協力を得て「『震災を追体験する』方法として、定点観測写真を考える」という活動に取り組んでいる。これは阪神・淡路大震災当時に神戸市東灘区森南町在住の女性による自費出版の写真集『翔け神戸：阪神・淡路大震災の定点撮影』に収められた組写真(発災直後の写真と同じ場所を3～5年後に復興過程の記録として撮影したもの)の続き、つまり組写真の3枚目を撮影し、キャプションを付与することで震災を追体験するという取り組みである。2013年度には複数の新聞社からの取材に加え、人と防災未来センターでの展示、2014年度には大阪の寺院での展示やテレビ取材対応、さらに2016年度には人と防災未来センターが事務局の「災害メモリアル



図2：人と防災未来センター資料室ニュースVol.53より (2014.3 発行)

アクションKOBÉ」への参加とNHKラジオによる取材と、多方面からの協力と関心が寄せられる中、減災Pの受講生らのバトンリレーで大仁さんが遺した123箇所の「今」を記録し、当時多くの方にもたらされた悲しみと発災から復興と現在に続く時間の経過に思いを馳せる機会を得ている。

また、新潟での関わりは、春の田植えと秋の稲刈りを手伝いに行くことを授業として行うことで、夏の盆踊りに誘われた学生が任意で参加するようになり、秋の稲刈りの後には10/23の慰霊祭に参列、そして冬には雪深い集落の暮らしを体験するという動きが起きるようになった。⁵これは活動先が新潟県中越地震で3名のお子さんが亡くなった小千谷市塩谷集落であり、つまり現地再建を選択した人たちが立ち上げた将来の理想的な集落のあり方を外部の人々と交流しながら学び合う「塩谷分校」の活動に参加することで生まれた動きである。また、塩谷集落では集団移転事業で集落を離れた人々や、復旧・復興の過程に携わった外部支援者、さらには復興が達成された後にまちづくりの仲間として集落を訪れた人々らが築100年あまりの古民家を拠点に活動する「芒種庵を創る会」という団体もある。震災Pから減災Pへと拡充するにあたって、兵庫県西宮市に事務所を置く日本災害救援ボランティアネットワークの協力を得たことは先に述べたが、その理事長が大阪大学の渥美公秀教授であったこと、加えて関西学院大学の関嘉寛教授の前任校が大阪大学で渥美教授と共に新潟県中越地震の発災当初から塩谷集落を支援してきた後にゼミで活動していること、さらには田植えや稲刈りに加えて花壇づくり等の日常的なボランティア活動に地元の長岡技術科学大学が参加していることなど、大学間連携・交流の機会が多いことも塩谷集落の特徴である。そうした特徴は山口ら（2019）で詳述したが、関西から遠隔地でありながら、復興の過程で一部は取り戻され一部は新たに見出されていた現地の生活リズムを体感し、都市型の災害とは異なる被害の特徴を理解しながら、被災された方々からの経験を末災者が伝承していく実践的な学びがもたらされている。

4. わかりえなさがわかるということ

今回は筆者が担当する立命館大学のサービスマーケティング科目「シチズンシップ・スタディーズ」で

災害復興支援をテーマに震災・防災・減災をテーマした授業で、学習者がどのような集団的な学びと成長を遂げているのかについて焦点を当てるべく、プロジェクトの経緯と経過をまとめ、実際にどのような活動を展開してきたか、述べてきた。ただ、勤の良い読者の方にはお気づきのことと思われるのだが、東北との関わりについて、あまり紙幅を裂いていない。言い訳のような物言いと捉えられそうだが、東北の中でも福島県楡葉町をフィールドとした活動と学びは、次回、じっくり取り上げることとしたい。その理由は、サービスマーケティング科目を通じたピア・サポートがなされた結果、正課科目と課外活動との効果的な連携、発展的な展開がもたらされたためである。

沖（2016）は、先行研究と立命館大学の各種の取り組みの比較と整理を通じて、ピア・サポートを「報償のあるなしに関わらず、同じ学生(peer)同士が専門性を持つ教職員の指導のもと、仲間同士で援助し、学び合う制度」（p.3）と端的にまとめている。ピアとは仲間という意味であり、直接的には学生のみを指すわけではない。さらに踏み込めば、「同じ学生どうし」と一括りにされることを嫌がる学生（どうし）もいるだろう。したがって、ピア・サポートの重要性は、全く同じ立場・境遇・属性ではないが、仲間どうしという一体感・連帯感を携えて、何らかの目的を達成していくコミュニティの形成を図るということにあると捉えることができよう。

楡葉町を含む福島県沿岸部（いわゆる浜通り）では、減災Pのかつての受講生やその仲間たちが生活者となって大規模・広域・複合型災害を経験した地域の新しい日常をよりよいものにしようと奮闘している。その端緒は、2012年度の減災Pの受講生らが受講中に立ち上げたサークル「そよ風届け隊」だと断言できる。その設立当初からの動きを知る者としては、今回の連載での用語で言えば、越境的対話と創発の連続であった。もちろん、全てが順風満帆ではなく、現地の大学（いわき明星大学など）との協働により東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内から避難された方々への支援へと駆けつける中で、さらにその後は避難指示解除の準備の段階となると帰還するかどうかの選択を通じた住民の方々葛藤に向き合う中で、当事者ではないゆえのもどかしさを学生らが抱いていたことをよく覚えている。

今回は、福島県楡葉町での活動を中心的に取り上げ、放射線という目には見えないものがもたらす被害と奮闘した正課科目と課外活動の両面から、学生としてどのような学びと成長をもたらしたかを明らかにしていく。ある学生は休学を選択し、ある学生は福島でのインターンを選択した。そうして現地に向かった仲間と共に、京都を拠点

としつつも現地の住民の方々を巻き込んで瓦版を作成する取り組みが始められることになった。当事者の悲しみや苦しみはわかりえあないことがわかった学生らが、いかにして未来を拓く新しい当事者になっていったか、その学びと成長の径路を辿っていくこととする。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 赤澤清孝・其田雅美・八重樫綾子・山口洋典. 2013. 大学と震災とボランティアセンター. ボランティア学研究, 13, 25-38.
- Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- Furco, A. 1996. Service-learning: a balanced approach to experiential education. in Taylor, Barbara. and Corporation for National Service (eds.), Expanding Boundaries: Serving and Learning. Corporation for National Service. 2-6. 香川秀太・青山征彦(編). 2015. 越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ. 新曜社.
- 松岡正剛. 2019. 編集力：千夜千冊エディション. KADOKAWA
- 沖裕貴. 2016. 立命館大学のピア・サポート・プログラム—その特徴と課題、今後の展望—. 立命館高等教育研究, 16, 1-17.
- 諏訪清二. 防災教育の不思議な力：子ども・学校・地域を考える. 岩波書店
- 谷内博史・高見良一・赤澤清孝・山口洋典・松井かおり・甲賀光秀・齋藤重. 2012. 座談会「阪神・淡路大震災」と学生ボランティア活動. 立命館百年史紀要 20, 141-209.
- 山口洋典, 渥美公秀, 関嘉寛. 2019. メタファーを通じた災害復興支援における越境的対話の促進：新潟県小千谷市塩谷集落・復興10年のアクションリサーチから. 質的心理学研究, 18, 124-142.

【注】

¹ サービス・ラーニングの手法については、Furco（1996）の論考などを引用しつつ、本連載でも繰り返し述べてきているとおり、現場での活動と教室での学習との均衡が図られることが特徴である。そのため、コアタイムでは科目担当者による講義、ドキュメンタリー映像鑑賞等を通して意見交換を行い、東日本大震災からの復興動向に関しての関心と理解を深めた。また終了後には同教室にて、学生らの自主活動の奨励と促進を図るべく、受講生が主体的に相互の議論と交流が図られた。そして開講当初の10月26日には合宿も実施され、これらの過程で受講生の自主性・自発性・積極性・継続性を前提とした活動の骨格が定まった。具体的には、(1)「Rマークプロモーションコンテスト～みんなで広げよう！復興支援の輪部門」に新たな形態での募金活動の提案（「おつりで衣笠とBKCから東北を灯そうー『おつRITSプロジェクト!!』」を提案）、(2)気仙沼市・大島での写真教室の企画運営（富士フィルムの支援のもと現地の公民館・児童館の協力により12/9～11、12/17～19、3/3～4の3回にわたり小中学生らが現地の復興の証を写真で撮影）と京都・滋賀での展示（1/17～20に京都外国語大学ユニバーシティギャラリー、2/25～26にエポック立命21）、(3)地域防災イベントの共同運営（2/12の衣笠キャンパス周辺住民を対象とした防災イベントで炊き出しを担当）、(4)活動報告会でのコメント等を踏まえて夏期休暇中を中心とした復旧ボランティア活動のフォローアップ（3/22～26に岩手県大槌町・宮古市に受講生らが訪問）という具合である。一連の取り組みに関連した原稿として、赤澤ら（2013）がある。

² 長らく兵庫県立舞子高校で防災教育を推進してきた諏訪（2015）は、未災とは「被災の一手手前」の状況にあり、明日被災するかもしれない人々を未災者と呼んでいる。災害が多発する中で日常的に「災害を被る（被災）」ことは「災害は未だ被らず（未災）」であって「災害の被害の状態には非ず（非災）」と、被災と非被災ではなく被災と未災を対として捉えようという提案である。2018年度からは減災Pの受講ガイドにて「日本で唯一の環境防災科がある兵庫県立舞子高校で用いられた概念で、未だ被災経験のない世代が防災について学ぶ大切さを確認することができる」と示している。

³ 同書は著者である松岡正剛が2000年に開始した書評サイト「千夜千冊」を再構成したものであり、当該箇所は2005年の5/30にカール・ポランニーの『暗黙知の次元』に対して記した書評である。ちなみに創発（emergence）に関連して、前掲のサイト「千夜千冊」の併載コラム「セイゴオ『ほんほん』」の29回（2020.4.28）には、COVID-19の状況に関連づけて、次の記述がある。「『有事』はエマージェンシーであるのだからこれは「創発」をおこすということであり、さらにコンティンジェンシーでもあるのだから、これは「別様の可能性をさぐる」ということなのである。」よって、創発は「おきる」あるいは「おきた」という結果論あるいは運命論的なものではなく、設計論あるいはシステム論的に「おこす」ものと捉えられる。

⁴ +R人No.176（2011年1月6日更新）「伝えたいのは、笑顔のパワー！」黒田淳一さん（政策科学部3回生）国際ボランティア団体 関西おおぞらプロジェクト 元代表、MERRY PROJECTメンバー。

⁵ 農業はタイミングを逃すと場合によっては1年間の収入が失われること、それゆえ生活再建のために現金収入を途絶えさせないこと、一方で農家の方々にとって田畑は自分たちの誇りであること、それらを加味して、農業復興に取り組む意義が理解された。そしてこの発想は平成28年熊本地震でも、外部支援者との連携のもとで進められる支援の上で重要な視点となった。